

## 2021年1月24日 説教「夕暮れに涙が宿っても」

創世記 46章 28～34節

ヤコブ（イスラエル）は、親族共々エジプトの地に足を踏み入れました。そして、いよいよヨセフとの再会の出来事になります。

### 1. ヤコブとヨセフの再会（28～29節）

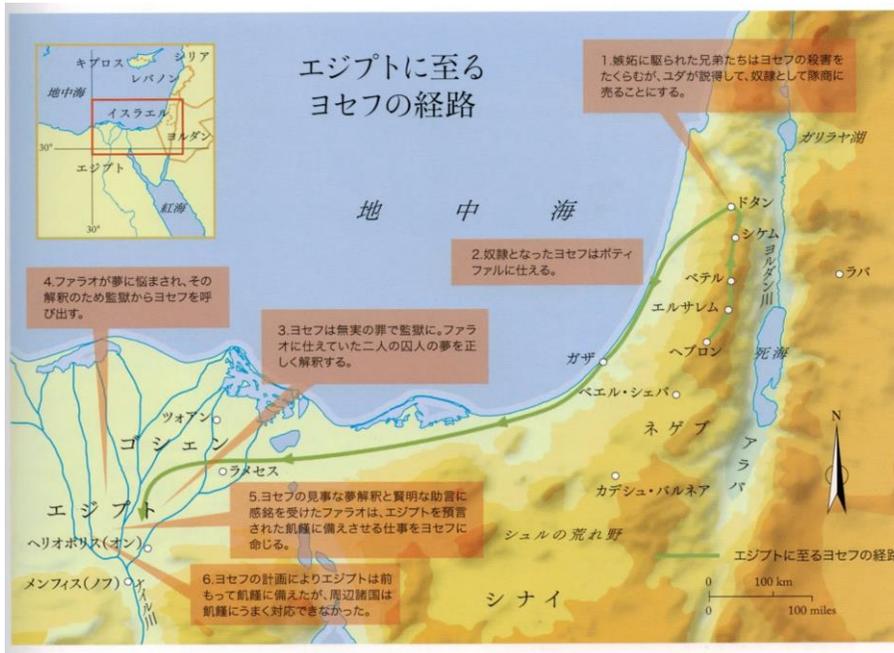
①ゴシェンの地に（28）「さて、ヤコブはユダを先にヨセフのところに遣わしてゴシェンへの道を示させた。それから彼らはゴシェンの地に行った。」エジプトに入ったヤコブは、そのことをヨセフに伝えるために四男ユダを派遣しました。今やユダは息子達の代表の役割でもありました。そして、自分達がゴシェンの地に向かうので、そこで落ち合うように手筈を整えたのです。ほどなく、ヤコブの一行はゴシェンに到着しました。ゴシェンの地は地図にもあるように、平野で居住と牧畜に適していました。

②ヨセフもゴシェンへ（29）「ヨセフは車を整え、父イスラエルを迎えるためにゴシェンへ上った。」一方、ヨセフはユダからの連絡を受けて、車を用意させて、ゴシェンへと向かったのです。ヤコブの車もそうであったでしょうが、座席がついていたのでしょうか。総理大臣が乗る車ですから、安定性と安全性が保証されていたと想像させられます。ヨセフの心はゴシェンの地へとはやっていたことでしょう。エジプトの地に来てくれたことを、心から歓迎したかったことでしょう。

③首に抱きつき（29）「そして父に会うなり、父の首に抱きつき、その首にすがって泣き続けた。」そして、ヨセフもゴシェンの地に到着。父ヤコブと再会が実現しました。父は老いていました。また、ヨセフは30歳で宰相となり（41:46）、その後10年近くたっていましたから、合わせれば20数年たっていたでしょう。ヨセフの姿かたちは風格があり、見違えるほどだったでしょう。兄弟たちが食糧の調達に行った時に、ヨセフだと気づかなかったように、もし予め知らされていなければ、ヨセフであるとはわからなかったでしょう。ヨセフは会うなり、父の首に抱きつきました。年齢は関係がありません。自分を愛してくれた父のことは忘れたことはありません。ヨセフはその首にすがるようにして泣き続けたのです。兄達との再会とは違った時でした。

### 2. パロの所に報告に行くにあたり（30～32節）

①もう死んでも良い（30）「イスラエルはヨセフに言った。『もう今、私は死んでも良い。この目であなたが生きているのを見たからには。』イスラエル（ヤコブ）にとっても、この瞬間はその人生において、かけがいのない時であったでしょう。それは、パダン・アラムからカナン



は、ヨセフが宰相であるかなどはどうでもよかったのです。息子と再会できたことが至上の喜びだったのです。

②パロの所に(31a)「**ヨセフは兄弟たちや父の家族の者たちに言った。『私はパロのところに知らせに行き、申しませう。』**」その後ヨセフは兄弟たちや70人に及ぶその家族たちに言いました。「これから私はパロのところに、このことを知らせに行きます。」と。宰相がエジプト王パロの所に出かけて、エジプトにやって来た家族のことを知らせるといった私的な報告は、普通では考えられません。国には当時なりに、懸案というものがたくさんあったでしょうから。しかし、ヨセフが父ヤコブとその家族が、こちらで安定した生活をするを、とても重要なことであると考えていたと言えましょう。

③父の家族が来た報告(31b~32)「**カナンの地にいた私の兄弟と父の家族たちが私のところに来ました。この人達は羊を飼う者です。家畜を飼っていた者です。彼らは、自分たちの羊と牛と彼らのすべてを連れて来ました。**」ヤコブがパロに伝えようとしていたことは、まずはカナンの地の家族がエジプトに到着したこと。次に、彼らが羊飼いであって、家畜を飼う者達であること。さらに、彼らは自分たちの羊や牛を、自分たちで連れて来たということでした。

### 3. 羊飼いであることをパロに伝えることについて(33~34節)

①想定問答(33)「**パロがあなたがたを呼び寄せて、『あなたがたの職業は何か。』と聞くようなときには、**」宰相であり、彼らの親族であるヨセフの言葉は続きます。ここからはアドバイスとも言えます。今後もし、「パロがあなたがたを呼び寄せて、職業は何か」と聞くような時にはと言っていますが、ヨセフは本当に知恵者ですね。パロの質問を想定して、イスラエルの家族を援護しようとしているのです。

②パロへの答え方(34)「**あなたがたは答えなさい。『あなたのしもべどもは若い時から今まで、私たちも、また私たちの先祖も家畜を飼う者でございます。』**と」その時はこのように答えなさいというのです。想定問答の答えの方です。「あなたのしもべどもは、先祖以来家畜を飼う者です、と率直に答えなさいというのです。つまり、これまでもそうであるように、これからも、政治的野心などは、全くないということを、パロにわかってもらわなければならないのです。

③嫌われた仕事なので(34)「**そうすれば、あなたがたはゴシェンの地に住むことができますでしょう。羊を飼う者はすべて、エジプト人に忌みきらわれているからです。**」それに、元々内定していたとはいえ、ゴシェンの地は牧畜には、気候面などでも最良であったからです。また、いささかでもカナンの地に近い所に根拠地があった方が、ヤコブ一家には安心感が生まれると判断したのかとも思われます。

《結論》ヤコブはヨセフをとっても愛していました。それは兄弟たちを怒らせ

ることになりました。ヨセフは17歳の時に、自分の見た二つの夢を兄弟達や父に知らせたことで、兄弟達はますます彼を憎むようになりまし

た。そして、ヨセフが父の使いでドタンに行った時に、兄達は隊商にヨセフ

を売ってしまうのです。以来ヨセフはエジプトで生きることになりました。

そしてこの時から、ヤコブとヨセフは別れて生きることになりました。

父ヤコブはヨセフが死んだと思っていました。一方のヨセフはまずは奴隷の立場で働き評価されました。しかし、真実に生きた結果、牢獄に放り

込まれました。しかし、夢の解き明かしを通して、パロに召喚され、結果

として宰相の地位に就くという数奇な人生を送ることになりました。

この20数年間の父ヤコブとヨセフの心の動きは全く異なっていました。父ヤコブは父、祖父の信仰を受け継ぎつつ、一家の大黒柱として歩んできました。でも、心のどこかに失ったヨセフのことがあり、心に傷みがありました。ヤコブの信仰生活は、我々が難しさを抱えながら主を見上げていくというあり方と変わらないと言えるでしょう。どんな信仰者も問題なしという人はいないのです。辛さを主に申し上げながら進んでいく

のです。一方ヨセフは、一人エジプトにやって来て、父も兄弟達とも離れて生きることになりました。生身の父がいない中で、父なる神様を「父」とすることを覚え始めたのではないのでしょうか。讚美歌434番1節に「みかみを父とあがめまつりて」とありますが、作詞者も父なる神を父としていたのです。そういえば、2019年のコンサートに来て下さったアントニオ古賀さんは早くに父を失っていたので、父なる神を知った時にはお父さんを知った気がしたと証してくれました。

ヨセフとは言えば、神を見上げながら、自分を「ここ(エジプト)に遣わしたのは、あなたがたではなく、実に神なのです(45:8)」と告白するほどに、異教の地であって父の信ずる神への信仰を深めていたのです。そして、その神が父親と再会させてくださったのですから、慈しみ深い神の恵みをかみしめたことでありましょう。

週報の教会の交わりで記した、バイデン大統領が演説の中で引用した聖書箇所とは詩篇30:5です。「夕暮れに涙が宿っても、朝明けには喜びの叫びがある」。コロナ時代の世界、深刻な問題を抱える合衆国、そしてこの国、この地の教会、私たち一人一人の歩みにも、どこにも問題が山積し、涙を伴う場面もあるでしょう。しかし、長い苦しい年月を経て、ヤコブとヨセフにも再会の喜びが与えられました。ヨセフと再会した今

は、「もう死んでも良い」と、ヤコブに言わせるほどにうれしいことでありました。またヨセフも、父の首に抱きつき、その首にすがって泣き続けるほどに、その再会の恵みを喜んだのです。がまんしていたものが、そこに噴出したのでありましょう。その喜びは私たちにも備えられているのです。今は夕暮れで涙の日々であっても、朝明けには喜び叫びをあげる時がくるのです。そのように信じ、進んで行こうではありませんか。